

メキシコ 訪問記

国家的植林プロジェクト センブランド・ヴィダ

2019年からアムロ大統領が重要な国策として取り組みを始めた植林プロジェクト「センブランド・ヴィダ」。この間、コロナ禍のため現地を訪ねることはできませんでしたが、2022年11月、約3年ぶりにメキシコに行くことができました。気候変動やコロナの影響を受けながらも、スタートから3年が過ぎ、現地の人々は森を舞台に森林農法(アグロフォレストリー)に取り組んでいました。各地で実践されていた植林活動の様子をお伝えします。(文:ウインドファームスタッフ 井上智晴)

放牧地をアグロフォレストリーの森へ

馬や牛の放牧を長年続けた場所は、土が踏み固められて農業には適しません。ソチトラン村では、こうしたかつての放牧地を、アグロフォレストリーの森に戻す活動も行われています。そのためにまず3年間、トウモロコシ、カボチャ、豆科の植物を植えて柔らかい土壌を回復させました。また急斜面でもあるため、土壌流出を抑えるためにサトウキビを植えて、それをきび砂糖の原料とします。さらにコーヒーの苗木、建材となる樹木、果樹も植え始めており、数年後には豊かな森が再生されます。



かつての放牧地にサトウキビ(右上)とコーヒー、建材となる樹木を植林。建材として使用できるのは20年以上先の次の世代に残すための森づくりとなっている。



サトウキビの収穫作業

きび砂糖づくりの復活を目指して

「センブランドヴィダ」では、それぞれの村で生産者が集まり、グループを形成して活動が行われています。その活動は植林に限らず、自然や文化の再構築につながる活動も含まれます。プエブラ州ソチトラン村のグループは、プログラムに参加することで得られる収入を持ち寄り、きび砂糖づくりの機材を購入することを決めました。以前は地域で行われていた伝統的なきび砂糖づくりの復活を目指しています。まずは今年、勉強会も兼ねたきび砂糖づくりのワークショップが開催されました。



きび砂糖づくりのワークショップは村人総出の行事として行われていた。

バナナの栽培に挑戦する ベラクルス州パントラ地区

メキシコではバナナ栽培が盛んですが、その多くは仲買人が生産者から安く買い上げて、世界に輸出されているのが現状です。しかし、バナナの産地として有名なパントラ地区では、元トセパン協同組合のスタッフがコーディネーターとなり、センブランド・ヴィダの枠組みを利用してバナナの生産に取り組んでいます。

バナナはツル性の植物のため、支柱として柑橘類の樹木を活用することで、栽培する農作物の多様化も図ります。パントラ地区の生産者は100万本の苗木を植えて、2022年に初収穫を迎えました。2023年からは本格的に収穫が始まりますが、まだしっかりとした販路がないのが課題です。そのため、新たな組合の設立と有機認証の取得に向けて、独自の販路開拓に取り組んでいます。



樹木に巻き付き成長するバナナ

プログラムによりつくられた苗床

またソチトラン村では以前、苗を購入するために、日雇い仕事をしなければならなかったことがありました。現在はセンブランドヴィダによる収入で農業に専念できる環境が整い、グループのメンバーも参加して苗床が設置されました。今では自分たちの苗をつくり、さらにその販売で収入を得られるようになりました。



生産者が作り上げた苗床。村の伝統野菜の苗木も増やすことができた。



苗床の一角では、ハーブ・薬草を栽培して伝統医療に活用されている。



(上) 収穫直後
(左) 発酵、乾燥処理後